



「それじゃあ、動機か。チョコレイトを手に入れて得をする人……喜びそうな人、そういう特徴を持った人がいるかという話ですよ」

「けれどこれって、身内の告発という悪い印象がないですか？ それを皆の前でやるのって、いささか今後に禍根を残すことになるんじゃないですか？」

「左ノくん、あなたにしては解かっていない——いえ、優しい意見ね」

と、春花は声の調子をおとして彼を一回見遣る。

「そもそも、スジを逸したのは人のモノを奪った人間でしょう。それに対してこちらがどう動くかを弁えなかったのだとしたら、それで他人に迷惑が及ぶことを看過できないとしたら、そういう者は今すぐ自分が盗ったと名乗り出るべきだわ。甘さに付き合う謂れはないわ」

私たちは獅士堂の組の者よ。

春花はそう言って眼光を強めた。

それだけで、この郷の半分を治める総元締めの種類に害が及んだ事態に関わって、いい加減では済まされないことを肌で感じさせられた。

「春花さん、お手柔らかに行きましょう……」

場の空気が寒気の他にピリピリと張りつめだしたので、仁美は苦笑まじりに言った。

その横で雪絵は、（勉強になるなあ……さすがだな） と思っていたりした。

「そうね。場合によっては手心もあるけれどね。では、何か思い当ることがある人」

と春花が言ってみて、女中と中間、その補佐の左馬ノ介たちは互いを見つめて、しかし口を開くことが出来ない。そうして互いに牽制しあう沈黙が続く。風がガタガタと雨戸を揺らし、部屋の温度がさがってきたのを受けて、福珠が身を立たせ、火鉢に向かう。

「夜も遅いですし、冷えますし、なるだけ早く済ませたいですね」

その言葉に対して、つばきが口を開いた。

第三章 太刀の五

「福珠さんは、最近虫歯が出来始めたそうなので、甘いモノは食べないと思います！」

「ああ～。そうだね、さすがつばきちゃん～」

「甘いモノなら、やっぱりこいつが疑わしいと思いますけどね」

「そんな～、つばきちゃん～っ」

二人の遣り取りに、春花も仁美も笑い、雪絵も口元を緩ませた。

「甘いモノを好きな人、甘いモノを食べる人、かあ」

「辛党の人は？」 雪絵の声に左馬ノ介が、

「というか、自分は苦味党ですが」

と手をあげた。つばきもあげていた。

「左ノくん、若いのに本当に老成しているわね。早熟というか、しぶい舌だわ」

「ははは、まあ子供の舌じゃあ厨房を回すのに不都合もありますし、役に立っていますよ、この味覚も」

「でも、甘いモノが決して食べられないわけじゃあないわよね」

にっこりと笑う春花に、左馬ノ介は 「はあ、まあそうですね」 と曖昧に応えた。

「じゃ、もっと簡単に行こうか。甘いモノが好きな方、挙手をお願いします。

.....あ、別にそれだけで犯人決定したりはしないので、気楽にお願いします」

仁美の言葉に応じてあがった手は、二つ。

一つは当然のように、ひなぎくだったが、もう一つは仙蓼だった。

「仙蓼さん、甘党だったんですか？」

左馬ノ介が彼を向いて、意外そうに言った。

「.....うん、まあね。青刃あたりや、ここらのシマの和菓子屋にも顔なじみが何軒かあるくらいには、ね」

「へえ、それは是非、ルートの開拓のために紹介して欲しいですね。屋敷でもお客に出すお茶請けに幅を持たせたいですからね」

「いや、そんな大したモノじゃないよ」

「バカ左ノ一、脱線してるぞー」

ともあれ。

「うーん、これだけでも言うと、容疑者は絞られる、のかな……？ 甘いモノが好きな人が盗ったというパターン」

「パターン？」

「ああ、そういう方向性ね。類型というか。色々考えられるうちの一種」

「ははあ、それだと他にも考えられそうだよな」

「へえ、雪絵にしては珍しモノ言いじゃん。例えば？」

「……えっと、甘いモノが好きな人以外が、甘いモノを好きな人に甘いモノをあげようと思って持ち去ったパターン、かな」

雪絵のセリフに、合いの手を入れていた仁美が眉根を寄せた。

「？ あんだって？」

「いや、わかるわよ雪絵。つまり、誰かのために、という動機で持ち去ったという可能性があるかもしれない、と」

春花の言に仁美も、場の一同も納得した顔になる。だがしかし、と仁美は思う。

「でも、動機の幅を持たせ出したらキリがない気もするなあ。ぶっちゃけ、ただ単に人に嫌がらせをしたいだけで隠し、持ち去ったという線だっただけじゃあないでしょうし」

「私たちそんなことしませんよ！ 奉公人なのにッ」

「そだね～、喰いっばぐれちやうもんね～」

「まあ、あんたは、一時の食い意地で盗ることもありそうだけれどね！」

「もう～、つばきちゃん～っ そんなことないもん～」

場を和ませてくれる若い二人に、ここで仙蓼が腕を束ねて、遠慮がちに意見を出した。

「……誰も自分が犯人だなんて思われたくないですが、しかし、大姐さま……これはこの場で犯人を特定しないと済まされないのでしょうかね」

「……私もそう思いますねえ」

いつの間にか静かに座に戻っていた福珠も同意した。

それに対してやや考えてから、頷いて春花は返す。

「それはある意味然りね。私たちも、ただ失ったモノが戻ってくれば良いと思っ
ていのも、あるにはあるわ。さっき左ノくんが言ったように、余計な禍根を
無暗に生じさせることはない、私も思うわ」

「.....じゃあ、どうするんです？ 春花さん」

そうね、と春花は頬に手を当てて、少し考える。

「.....じゃあ、もう今夜は遅いから、明日の朝まで時を置きましょう。この一
席を受けて、もしかしたら、それでなくなったモノが見つかることがあるかも
しれないわ」

「.....そうかなあ」

いまいち大人たちが意を交わしていることが分からない、という風に雪絵は
眉根を寄せた。

「雪絵の不安と不満もわかるわ。だから、そう、一晩待ちましょう。それで状
況が好転しなかったら、その時はまたこの面子で相談し、追及しましょう。そ
れでどうかしら？」

「まあ、私はさっさと、はっきり決着させたいですけどね」

「.....うん、春花さんがそう言うなら、今はそうしてみる」

春花に対して、仁美が唇を尖らせ、雪絵がゆっくりと、それでも素直に了承
の頷きをした。

「んー、つまりお開き。終了、解放ってこと？」

「一旦みただけけれど、そういうことかな～」

笑い合う女中二人を視て、福珠と仙蓼、そして春花が目で笑い合った。

「にゃんだかなー、こういうのって、学校で悪さした子に対するあれみたいだ
なー」

「学校って、西方の？」

「うん」と返す仁美。雪絵と仁美が話す声に、向こう側の女子二人も応じる。

「にゃんだかなーって、にゃんこにゃんだよなー、みたいだね～、つばきちゃ
ん」

「いや、いくらなんでも、にゃんこなんだってことはないだろ、おい」

その遣り取りを耳にして、今度は雪絵たちが応じた。

「にゃんこ……って、猫？ 猫なんだったら……ってどういうこと？」

「え？ も一、ひなが訳わからないこと口走ってすみません。あのですね、まあ猫が啜えて持って行ったりとかしたり、という可能性があったりするかなーって……」

与太話めいている内容が無いことだったので、それらしい意味合いを考えだすのにつばきは口調が淀んだ。しかし、その露骨な本筋と関係のない雰囲気の話、仁美は拾う。遊びだったかもしれない。

「猫が持っていくって、そんなオチあり？ っていうか、この離れに猫なんかいるの？」

表は大雪が積もっているけれど、と仁美。

「いるんですよ、それが」

福珠が言った。

「勝手の間脇の納屋に、時々寝床にしている猫がね。白猫ですよ。首に鈴をつけた。ここが気に入っているんですかね。悪さをしない品の良い猫なので、私らも無理に追い払わないんですがね。だからまあ……」

その話を耳にして、雪絵は頬に片手を当てた。少し記憶の奥が刺激される気がした。

(白い……鈴のついた猫……？)

どこかで、と思いつつ、その思考は仁美の大きな声に遮られた。

「え、それって、もしかしての中のもしかしての可能性ではあるけれど、その猫がいて、いつの間に

かこっそりそろりとチョコの入った箱を啜えてトコトコ歩いて行った、という線があるかもしれないってことじゃないですか？」

「容疑者がもう一人……この場合は一匹か、それが隠れていたってヤツですか」と左馬ノ介。

「よし、じゃあ今日は、後はその猫を見て、チョコレートがあるかないかを調

べてみよう。どうよ、雪絵」

「うん……まあ、万が一ということもあるかもだからね、調べてみよう」

福珠がひなぎくとつばきに指示を出す。その猫の居場所に案内してくれるようだ。

「でも……」

と、左馬ノ介が立ちあがった女子たちに、何の気もなしに、ただ事実を告げるように声をかけた。

「なら、気をつけて早くした方がいいかもしれませんよ。もし猫が、そのチョコレート箱を喰いやぶっていたとしたら……、まずいかもしれません」

「？」

立っている四人が四人とも、そして場の大人たちも、左馬ノ介に注目した。皆、意味が判りかねるという顔だ。

「あ、いえ。あまりこの郷では知られていないかもしれませんが、そもそもチョコレートが出回って、そして猫になんて与える人も習慣もないんで当然なんです」

「何だよ、左馬ノ介え、早く言えよ」

少し目くじらを立てるように、仁美が左馬ノ介を睨んだ。

「いえ、チョコレートに含まれるカカオには、テオブロシン……だったかな、そういう成分が含まれていまして、これは人間が摂っても平気なんです、犬や猫にとっては毒素となるモノらしいんですよ。だから、猫にはチョコを食べさせない方がいいらしいんです……」

「……え？ それって、そのにゃんこやばいんじゃない……いや、もしかしたらだけれど……」

仁美が二の足を踏む横で、ひなぎく、つばき、そして雪絵は叫んで走り出した。

「にゃんこちゃんが———っ!!」

夜分にばたばた床板を踏みしめ、勝手の三和土にある備え履きに足を通して、土間に降り立つ。つばきが灯りを持って先導し、次いで仁美と、珍しく勢い込んだ表情の雪絵も続いて、ひなぎくが「おっきい音立てたらにゃんこちゃんが驚くよ～」とトタトタとついてきた。

食事も調理できる釜がある土間は、本邸に比べれば手狭とはいえ、少女の四人が歩き回ってもまだ余裕のある広さだ。道幅脇に据えられた数架の木棚には様々な調理用の道具や、食器といった日用品が収納され、その奥まった先の、離れの裏手へと続く木戸の反対側に、問題の納屋へと続く扉があった。

「開いてるな……っつか、空^すかしてあるのかな」

「そうですね、ここの猫が自由に行き来できるように、普段から少し開けてあるんですよ、ここの扉」

「はあん、でもさ、そんなことして、この納屋から鼠や害虫なんかがこっちの部屋に這入ってきたら良くないんじゃない？」

つばきと話す仁美の言うことはもつともだ。同時にそれは、西方の近代家屋暮らしをしている仁美らしい意見ともいえる。その西方でも、気候の良い季節や天気の良い日などは窓を空かしたり、部屋間の扉を開け放して風を通す。

部屋間の気密性、密封性は、確かに小さな生き物が人間の生活スペースに這入ってくるのを防ぐ意図と働きもあり、近代家屋が主流な西方では、江戸の建築様式がそのままのこっている刀郷よりも、その度合いと意識が高い。

それでも、夏場は網戸などの隙間から虫が密かに忍び入ることもあるのだが、それは世界中、どこの地域の家屋にもある問題点であり、悩みどころだろう。尽きず、付き纏われる問題だ。

風を通さないと室内で生活する人間の健康にも障りがあるし、家中の空気や湿度などで早く家屋が痛む原因にもなりかねない。

「だから、ある程度そういうのは……そういうのっていうのは、嫌な虫だけけど、そういうの気にしないで空かしてあるんだよね」

つばきが気持ちの悪そうな、虫の話題で苦虫を噛み殺したような顔をして言

う。

それに対して、ひなぎくが今の話を意に介さないのんびりした声を出す。

「でもね～、ここのにゃんこちゃんは、そういうのを追っ払うためにもおいているんだよ～。鼠や虫を退治してくれる、偉い子なんだ～」

「ああ～、愛玩動物じゃなくて、益獣ってわけね」

益は利益のえきだよ、と仁美は雪絵に聞こえるように独り言ちた。

扱いは慣れている風であるが、ひなぎくとつばきは首を傾げる仁美の言だった。

「でですね、今日は外は大雪だから、あの猫も多分ここにいると思うんだけど……」

つばきが仁美の脇から前に出て、先導するように納屋の扉を開けて、手燭をかざし入れた。

ほのかに灯りの手が入り、そのしんと暗く冷たい部屋の中に……雑多に工具や農機具、刃を古紙でくるまれた除草用の鎌やシャベル、除雪用の大きな雪かきまでが居並ぶ様が、ぼんやりと照らし出された。

「にゃー」

「んん?! どうしたの、ひなぎくちゃん、だっけ」

「え～、にゃんこちゃんに御挨拶しているんですよ～。いきなり来て、暗くて静かなところで丸くなっているのに、驚かしちゃかわいそうですから～」

また、にゃー、と言って、今度はひなぎくが先に立って歩を進める。そして、灯りをかざし納屋の内の一番奥まったところにある、中ぶりの赤子の揺り籠よりも大きいくらいの木箱を覗きこんだ。

「にゃあー。……あ、いますよ、にゃんこちゃん」

「ん、どれどれ……」

「……………」

仁美が先の明るみに歩いていき、それに雪絵も続く。つばきは出入り口で手燭をかざして、部屋全体と奥との光を繋いでいた。モノが多いので、突然影から鼠でも出てきて、人間が驚いて脇のモノにぶつからない為の用心であった。

第三章 太刀の五

「あ、本当だ。白猫だ！ おーいっ……って半目でシカトかよ」

「人に慣れているんだね」

雪絵も横から身を割り入らせて、木箱を覗いた。

愛玩動物ではないと言ってはいたが、その木箱は猫の巣小屋として使われているようで、中底には使い古された布が敷き詰められて、その上に白い中くらいの大きさの猫が丸まっていた。

「かわいいですね～、にゃんこちゃん」

「可愛い、か……」

「ん、どした、雪絵」

「ううん、なんでも」

「でも～、なんかこの子、膨らんでませんか？」

「本当だな、なんかこう……」

「むう」

三人の女子がお尻を三つ連ねて木箱に向かい、箱の中の白猫に手を伸ばして撫で始めた。

それに対して、フウワァツと鼻頭に皺を寄せて、猫が気を立てた。

「うわっ びっくりした！」

手を引っ込めて、仁美が猫よりも目を見開いて驚きの顔をする。

ひなぎくも雪絵も、寄ってたかってとはいえ、撫でられただけでこうも猫が目くじらを立てるとは思わず、口を嚙む。

「んー、びっくりしたはしたけれど、この猫がもしあのチョコレイトの箱を盗ってきたんだとしたら、この小屋の中か、どこかだっるのが自然だよ。だから……」

「うん、だからやっぱりこの子を一旦どうにかしないと、確認できない……」

腕を束ねて天井を見あげる仁美と雪絵。それにつられてひなぎくも 「う～ん」と唸った。

「つばきちゃんはどうしたらいいと思う～」

「それはもう、がばっとね、抱き上げればいいのよ。引っ搔かれたり、咬みつかれたたりする覚悟でね」

「え？」

「って、あれ、春花さん！」

三人が声の方を振り返ると、そこにはつばきではなく春花が立っていた。雪絵と仁美が目を丸くする前で、着物の袖を軽く片手で押さえると、春花は木箱の中に腕を伸ばした。

その動きに、先程同様に白猫は厳しい声で威嚇し、牙を剥く。それでも表情一つ変えず止まらない春花の手は、猫の背中にするりとまわり、その毛並の身を掴もうとする。その途端、白猫は嫌そうに声をあげながら素早く身を振り、腕と頭、もっという口元を巡らせ春花のすりとした腕に対して爪と牙を立てた。

「春花さん！」

思わず雪絵が大きな声をあげるも、春花は動じることがない。肉を針で裂いていくような鋭い痛みが腕に走っている筈にもかかわらず、彼女は顔色を変えなかった。そして猫の氣勢に負けじとその身を掴んで、上体を起こした。

木箱から出された白猫は、中空で身をいやいやと振り、春花はそれに応じてその身から手を放した。納屋の土床に着地した猫は、さっと身を反転させて春花たちを睨む。尻尾の毛が普段の倍以上にぼわぼわに膨れて広がっていた。

怒ってるなあ、とつぶやく仁美と雪絵は顔を見合わせる。

「ごらんなさいな」

腕をさすりながら春花が木箱の中を顎で示す。そうしていても、猫の攻撃的な視線を受けて交差をし続ける春花を見遣ってから、雪絵は促されたことに従って木箱の中を覗いた。

「.....あ、これ、子猫？」

木箱の中には膨れて見えた白猫に包まれるようなカタチだったのだろう、小さな猫が二匹うずくまっていた。

「おお！ 本当だ、子猫だね。白いのに少しだけ茶が混じってる」

第三章 太刀の五

「少し寒そうですけれど、寝てますね～。かわいい～」

「ほら、あなたたち、のんびりしていないでその子らも出して、母猫に寄せてあげて」

と、春花が指示を出した。雪絵と仁美が二人そろって両腕を伸ばし入れて、それぞれに子猫を抱きあげた。最初はむずがゆそうにして半目を開いた子茶白猫たちだったが、二人が中空に持ち上げるとその手からうまいこと逃れ、地に降り立つと母猫の方に歩いて行った。

ナー、と二匹の子猫が哭き、母親の白猫がニャー、と小さく返した。

視線を春花から離し、威嚇と怒りの尻尾は納まっていった。

「子猫がいるから、守ろうとして怒ってたんですね～」

親子の猫たちを温かな眼で見つめながら、ひなぎくがのんびりと言った。

「ん、みたいだね。春花さん、大丈夫でしたか？」

大雑把な性格でも、そこは春花に心配そうに声をかける仁美。その横で、同じく心配そうに春花を視ていた雪絵は、はっとする。そうか、そういう風に普通に気遣いの言葉をかければいいのか。

「ふふ、大丈夫よ、二人とも。このくらい、なんてことはないわ」

「……そう？」

「そうそう、それよりも、視ていたかしら雪絵。猫とはいえ母親って強いわねえ。ふふっ」

そう言って、いつもとは違う笑い方をする春花。そんな母親に、雪絵は胸元に手を当てて、喉を鳴らした。

「あのね……春花さんっ」

「ん？ ……なにかしら」

「春花さんも、すごかった。ああいう時、尻込みしないで、自分の意思のままに、痛みも恐れずに動けるの……すごかった……！」

神妙そうな顔つきの雪絵に、春花は少し笑いをこらえながら、頬に手を添えて言う。

「そう？ それは私、いいところを見せちゃったかしら？」

第三章 太刀の五

そうして何もなかったかのように、着物の袖を元に戻す春花は笑顔だ。しかし、その腕の牙を立てられた穴と、爪で引っ搔かれて皮の剥けた痕が網膜に残像として残る雪絵は、胸の内で確かに思った。

(私も、こんな人になりたいな.....)

そんな雪絵の気持ちと熱い視線に気づかず、春花は背後を半身で振り返ると、問うた。

「どう？ 仁美ちゃん。目当てのモノはそこにあったかしら」

してみると、仁美とひなぎくが木箱の中を覗いていた。そこから顔を振り返らせて、首を振る仁美。

「んん.....、ないですねえ」

その横で、ひなぎくがぼたぼたと歩き回って言った。

「この納屋の中もそこらを簡単に見回してみても～、それっぽいモノはないみたいですね～」

ふむ、と春花は着物の袖を手繰り寄せて、身を抱いた。

「どうやら、猫が持ち去ったという線も、ないようかしらね。ま、福珠さんもこの猫は悪さはさないと言っていたからね.....では、ここに長居はしないでおきましょう。些かどころじゃないくらいに、寒いわ」

「そうっスね」

「そうですね～」

「うん」

それぞれが同意する。春花は納屋の闇中で身を寄せ合う猫の母子を視て、穏やかに言うのだった。

「それに、この母子の邪魔になってもいけないしね」

.....続く。